シリーズ
成田市
50年

⑧開港（昭和５３年）

昭和41年7月の閣議決定から12年の歳月を費やし、幾度となく開港が延期された成田空港。難産の末、昭和53年5月20日、開港にこぎつけました。

この昭和53年は、成田市が日本の新しい表玄関となったことを世界に示し、国際都市への幕開けとなる第一歩をしるした記念すべき年でした。

日本の新しい空の表玄関となった成田

国際都市への幕開け

昭和53年3月20日の開港を目前にした空港内では、搭乗案内の予行演習が行われ、慌ただしさと緊張感に包まれていました。また、懸案となっていた航空機燃料の暫定輸送は、3月2日から鹿島ルートが、17日からは千葉ルートによる輸送が開始され、あとは開港を待つばかりでした。

しかし、3月26日の午後、空港の中枢施設である管制塔が破壊される事件が起こり、開港は再び延期されました。

その後、破壊された施設の復旧も整い、昭和53年5月20日、1万人を超える機動隊・警察官に見守られる厳戒態勢の中で開港の日を迎えたのです。

開港式典は、旅客ターミナルビル北棟4階ロビーで、福永健司運輸大臣、大塚茂空港公団総裁ら58人が出席。続いて南棟脇に設置された用地提供者の顕彰碑の除幕式が行われました。

運航開始日となった翌21日午前8時3分、ロサンゼルスからの貨物一番機が反対派の燃やす古タイヤの黒煙の中をかいくぐるように4千m滑走路南側に着陸。この日を心待ちにしていた関係者からは、拍手と歓声がわき上がりました。そして、正午過ぎには旅客便一番機がフランクフルトより到着。

22日には、成田離陸一番機として大韓航空の貨物便がソウルに、旅客一番機として日航機がグアムに飛び立ちました。

23日からは国際線全便（147便）が運航されました。ターミナルロビーには、色とりどりのバックやスーツケースを持った各国の乗降客が行き交い、世界と結ぶ成田空港が誕生したのです。

第2サテライト24番ゲートでの出発記念式で握手をする長谷川録太郎成田市長（左）、真行寺一朗芝山町長（中）、朝田静夫日本航空社長（右）（5月22日）

右：千葉ルートの暫定輸送一番列車（3月17日）
左：成田出発一番機　大韓航空の貨物便ボーイング747（5月22日）
『新東京国際空港公団20年のあゆみ』昭和62年発行より転載

厳粛に行われた開港式（北ウィング出発ロビー、5月20日）

旅客一番機がフランクフルトから到着（5月21日）

数字で見る成田空港

	昭和53年度	平成14年度
乗り入れ航空会社	34社	68社
航空機発着回数	52,613回	176,365回
航空旅客数	6,391,369人	29,993,321人
航空貨物量	328,526t	2,030,149t
成田空港内従業員数	約15,000人（新聞発表）	45,763人

※資料は『成田空港 - その役割と現状 - 』2003年10月発行より

日本航空第一便に搭乗する乗客の列。乗客の内30組60人が新婚旅行であった（5月22日）

到着した一番機からの乗客を迎える職員（5月21日）

開港後の南ウィング到着ロビー